第２回審議会の振り返りについて①

資料１－１

【第２回審議会で扱った内容】

次期計画の終了年である2030年やその先の社会状況も見据えながら、**スポーツの持続可能性はじめ、**人口減少や少子高齢化の中でも都民一人ひとりが生き生きとスポーツに取り組める環境を維持していくためにはどうすればよいか、ご意見をいただいた。

【全般】

- 地域、企業、学校、そして個人に対するスポーツといったところでの**アプローチ、きっかけ作りが必要**。
- スポーツ実施者の減少・高齢化の対応については、スポーツのみならず、**地域住民の関係性が増し、共助できる環境づくりという視点**から議論をすすめていくべき。
- 現代人は忙しいので、**ライフステージやニーズに合った計画**を作って提供することが必要。

【子供のスポーツ振興における実施者や担い手の確保】

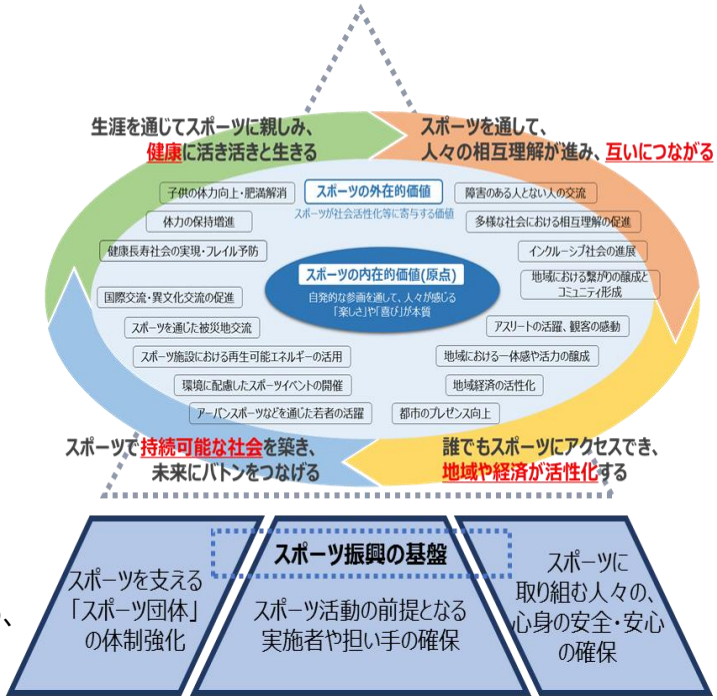
- 運動部の参加率が減っており、将来のスポーツを支えていく人材が先細るのではないかと危惧。子供は教育庁任せにしていたが社会で支えていくことを真剣に考えなくてはいけないのではないか。**若い世代のスポーツ好きをどう増やしていくかを計画に盛り込むことが大事。**スポーツ好きを育てる最も大事な「子ども期」を大切にする必要あり。
- する観点では、**中学校の部活動が重要。**スポーツ少年団から部活動へと繋がって欲しいが、部活動自体が減ってきている。部活動の地域移行に税金をしっかりと投入するべき。
- 部活動を地域に移行する動きがある中で、**人が減ると競技間でアスリートや監督などの人の取り合いが起こり得る。**システムを変えることは一朝一夕にはできないが、これまでの常識にとらわれずに、1年の中で複数競技に携われるような可能性の模索も重要ではないか。

【その他の担い手確保】

- スポーツを支えるという側面では**審判の高齢化や若手が参入しない問題**がある。人材不足解消のため、過剰な警備を減らすなどの簡素化も必要。
- **スポーツ推進委員の委嘱には任期や年齢制限があり継続が難しい**という面はあるが、都には引き続きスポーツ推進委員の研修やパラスポーツ指導員の養成をお願いしたい。

【スポーツを支える「スポーツ団体」の体制強化】

- 各団体に多額の資金を払うのであれば、その団体の管理や人事等にも都が関与するべき。また、これまで自ら資金を生み出す努力なしに補助金頼りだった団体について、**都も支援を行いながら自走できる仕組みを作るべき。**



次期計画の方向性（イメージ）

第２回審議会の振り返りについて②

【女性のスポーツ実施率】
- 女性の実施率低下は、対策をしなければ手遅れになってしまう。**女性のスポーツ実施率の低下が女性の健康状態を損ねている**ことがデータで示されている。実施率低下の要因の一つに女性の社会進出があげられる。子育て、介護、就労など、いまだに男性より女性の方が担っているものが多いため、女性にフォーカスしたスポーツ振興に取り組むことが必要。
- 両親、特に母親がスポーツをやっていると子供がスポーツをするという因果関係があることから、**女性の底上げをすることは、次世代のスポーツの担い手支援に繋がる。**

【高齢者のスポーツ振興】
- 楽しいのがスポーツ。体を動かすこと、人と一緒にやる事が楽しいと感じられる環境を町につくりたい。**自由な発想や柔軟な考え方をもった新しいスポーツや競技こそが今後持続できる。**また、歳を取って挫折感を味わうのではなく、達成感を味わえることも重要。
- 競わないスポーツをすることで、**フレイル・認知症予防**にもなる。こうした場を維持するためにも、高齢者クラブ等の団体に対して都がバックアップしていくことは必要。
- 単独高齢者が多いという資料があったが**スポーツを通してコミュニティ形成をすることで単独世帯の不安解消**につながる。
- 主観的健康観、自己肯定感、幸福感、地域に対する愛着などを感じとれる生活環境などの因子がウェルビーイングと強い相関関係を有していたため、これらの因子とスポーツを結び付けて、**ウェルビーイングを高めていく環境を整備していくことが大事**なのではないか。

【障害者のスポーツ振興】
- 都の障害者のスポーツ実施率は、国と比べても高い水準。ただ、今後**スポーツへの無関心の解消**を進めないと当事者の実施率向上は望めない。障害児がスポーツをするには、スポーツに出会った時のファーストコンタクトが重要。
- 障害者向けのスポーツについて、デジタルスポーツの体験会を行っている。以前はロボットを使っていたが、パソコンを活用したものも行った。**デジタルをうまく活用**すれば、今までスポーツと関わりのなかった方も関われる可能性が広がる。

【外国人対応】
- 外国人を受け入れる側が、外国人のためにすべきと考えていることと、外国人が実際に望んでいることが違うことが多々ある。当事者が何を望んでいるのか、**ニーズに基づいてきちんと考えることが大事**。

第２回審議会の振り返りについて③

【民間活用】
- アーバンフィットネス事業のような社会人がスポーツに取り組める環境整備も必要。**民間の力を活用して取り組んでいくべき。**

【大会レガシー】
- 2025年に世陸・デフがあり、イベントなどを行うことはいいが、点で終わらないことが大事。**点を線にすることで持続性に繋がる。**
- 世界で活躍できるアスリートの確保・育成について、施設、指導者、選手のリクルートの条件が最低限必要であり、そのためには予算措置と公共心を持った指導者の育成、管理が必要。また、働き方改革を踏まえつつも、**施設があり指導者のいる学校を拠点校として位置づけて強化することも考えられる。**

【都立スポーツ施設の役割】
- ソフトだけではなくハード面でも同様に柔軟性が必要であり、スポーツ施設の使い方についても、**スポーツ以外の利用方法を検討する**など、柔軟性を持って考えるべき。

【スポーツの範囲】
- **スポーツの在り方や求められることが変化**している。スポーツをずっとやってきた人は、従来のスポーツの概念にとらわれてしまうが、その固定概念を変えなければならないときに来ている。
- スポーツの捉え方のハードルを下げる必要がある。「する・みる・支える」の視点を変えてみてはどうか。障害者のスポーツ実施率は数字で出てくるが、「見た」「支えた」というデータが出てこない。最初はゲームや簡単な遊び（一人で楽しめるものも含め）など、**今までの考えを少し広げていくことも大事。**
- ゲームも活用し、自分の好きな時に、好きな場所で、好きなコンテンツができるとよい。
- 既存の枠組みにとらわれず、柔軟性と多様性をもつことが必要である。**デジタルスポーツ、eスポーツは誰にとっても親しみやすいものとなる可能性がある。**これまではゲームとされていたものも、見方を変えてスポーツとすることも必要かもしれない。

【スポーツの価値】
- 子供の野球で「リトルリーグ」があるが、親の出番が多すぎるため、親が負担を懸念して子供がリトルリーグに入ることを拒む人もいる。しかし、子どもに準備から全てさせることは、スポーツを実際にやること以上に学ぶことが多く、大切であると思う。また、学生スポーツでも、**勝利至上主義から人間力形成にシフト**しており、勝つ前に人間として行うべきことを教えるようになってきた。
- **スポーツ実施率の向上ばかりを考えていたが、ウェルビーイング（質）をどう実現するのかを考えていく必要がある。**そのために、スポーツに関する情報を適切に運用していく都民のリテラシーを育てる必要があるのではないか。フィジカルリテラシーの重要性は国のスポーツ基本計画にも入っており、情報社会で不可欠な力である。